書　評・紹　介

Jean-Claude Chesnais

Le crépuscule de l'Occident : Démographie et politique

Paris, Robert Laffont, 1995, 366pp.

本書の主題は『西洋の凋落期』で，表紙に示された標記の副題は『人口と政策』であるが，本文内には『出生減退，女性の状況，移入』というもう一つ副題が示されている．著者は人口政策を専門とする，フランス国立人口研究所（ＩＮＥＤ）の部長級研究員で社会経済政策との関連で人口研究を続けてきた．二つの副題からも明らかなように，著者は出生政策だけでなく，移入政策，そしてそれらを含む人口高齢化対策についても強い関心と深い学識をもち，多数の著作を出している．また，実体人口についても造詣が深く，例えば1986年に出版された『人口転換』は英訳すらされている．

本書は以下の計13章から構成されている．序章：工業諸国における人口学的危機，第１章：豊かな三極と出産ストライキ，第２章：パリ・ロンドン・ベルリン三角地帯，第３章：女性の復讐：不妊の南欧，第４章：家族なし？，第５章：欧州共同体…幻想？，第６章：ドイツ，粘土の脚の大国，第７章：東欧の忘れられた国々，第８章：旧ソ連圏の殉死者達，第９章：ＯＥＣＤ諸国における年齢ピラミッドの逆転とその影響，第10章：白人の要塞，第11章：地中海の亀裂と大量人口移動，終章：旧世界のルネッサンスのために擁護する．以下では日本との関連を中心に本書の内容を紹介する．

序章では日本を含む人口減少国と人口増加国に世界を二分し，前者では超高齢化が文明存亡の危機と経済的困難をもたらし，さらに後者における経済的困難を悪化させている可能性すらあることを指摘している．そして，人口減少国では適切な児童期政策により年齢構成を改善し，部門別労働力不足を外部からの供給によって改善することが必須であるという本書全体にわたる主張を述べている．第２章では欧州，北米とともに豊かな三極を成す東アジアの代表として日本の低出生力について論じ，日本の方が欧州よりも指導者の意識の上では未来志向的であるが，女性の必要に応じて労働を取りまく環境を整備するのが遅れているとの認識を示している．

第９章では欧州諸国より急速な高齢化が進む国として日本を取り上げ，高齢者医療費の本人負担割合が低いが，年金が充実してないため，特に高齢女性の貧困が生じていると述べている．また，日本の1985～86年の年金制度改革が厳しいことや，産業空洞化対策として日本が終身雇用と年功賃金の制度を見直しつつあることも論じている．さらに，各国における経済成長率低下の一因として出生率低下による消費者数の減少と心理的な経済活力低下を挙げている．最後に，ＯＥＣＤ諸国は高齢化対策として若い夫婦の社会経済的状況の改善と人的資本投資による出生促進政策を採る必要があると述べている．また，途上諸国との関係ではしだいに特権を放棄していく必要があることを指摘し，具体的内容としての移入を第10章で論じ，高齢化による労働力不足と相まって日本を含む恵まれた国々への移入圧力は強まるばかりなので，旧世界の国々は移民国にならって移民に依存していることを法的に確認し，経済的移民に関しては割当政策の方向へ移行する必要があろうと述べている．

第11章では日本が出生不足を移入によって補おうとすれば，未曾有の量の移民を導入せざるを得ないが，儒教文化圏から導入した場合は文化的適応が比較的容易であろうと述べている．旧世界の国々は移民を排除できないし，選択的移入は望ましいが，一時的で部分的な高齢化対策にすぎないとし，出生促進こそが本質的な対策であるとの主張を繰り返している．終章では欧州と日本で低出生力が人々の意識に根付き，先進諸国・新興工業諸国では女性の状況の激変による子供のコストの上昇が低出生力の一因となり，移入の人口制御に占める役割が増大しているが，低出生力社会においては一時的な高齢化対策に過ぎないと述べている．出生力回復のためには福祉社会が将来の担い手の若い世代により多くを配分すべきであり，ネオ・エコロジストの言説に惑わされるべきでないと結論づけている．

本書の主旨についてはフェミニストやエコロジストから若干の異論があるかもしれないが，人口政策，人口高齢化，欧州人口の研究者にとっては必読書であろう．

（小島　宏）